

ヒロシマ体験の記

昭和二十年七月、わが国の敗色が明らかになる中、米軍機の大編隊が次々と、東京はじめ日本の主要都市への「絨毯爆撃」を続けていた。兄茂は東大、私は京大の物理に在学中、そのころ夏休みは無かったが、二人は郷里の年老いた父母のことが心配だった。広島は第五師団本部所在地で、宇品は海外派遣軍の主要な出発港であるのに、まだ空襲を受けていないのが不自然で、いずれその標的となるのは時間の問題と思われたからである。

我が家は、約三百年前安芸の国（広島）に転勤してきた浅野藩主に同行してきた「典医」の子孫とかで、父恒三（明治 11 年生、岡山医専卒）は産婦人科を三十年余開業していて、同市山口町電停前の、薄汚い医院の風情とともに、一種「赤髭」的な存在だった。父は実際見事な髭の五尺そこそこの恰幅の小兵。（母久子が、一人っ子の恒三が兵役に取られたら医家断絶で大変と、背丈が伸びないように育てたとか）なお彼女はよろず森家のことを取り仕切っていたようで、後に私の名「一久」も意味深長と知る。

さて父母も空襲間近かと観念していて、家具等の「疎開」を始めたものの、特に愛玩の茶道具は枕元に置いて「イザという時は持って逃げる」とか言っているのを聞いて、心配は募るばかりであった。当時疎開禁止とされていた医師とはいえ、すでに六十八歳の父は、軍部嫌いのくせに昔気質で、後を継ぐべく長崎医大助教授を辞して帰郷していた長兄恒良が兵役にとられては、疎開などまったく念頭に無かった。

二人は協議の末、交代で帰郷してイザ空襲のときは連れて逃げる他なしと申し合わせたのは七月初旬。先ず近い京都の小生から、と帰広したのが確か八月三日であった。

母は久しぶりの私に栄養を付けようと思ったのであろうが、翌日広島から国鉄で二駅の海田駅から徒歩約三十分の、母の里「桑原家」に連れて行ってくれた。持っていった着物等を近くの農家で米や野菜に交換してもらい、自家製の野菜等も頂戴して、同家を辞したのは既に日暮れ時。同家では、夫を戦地で亡くされたユキミさんが義父久松氏と二人の幼児を抱え、家事・田畑一切を切り回しておられた。後日小生は、母が逃げ場所を教えてくれたのか、との思いを禁じえないが、あの時の、薄暗い田舎道の、重そうなリュック姿の母の姿は、私の脳裏に焼きついている。

深夜の「最後の茶会」

八月五日の夜は空襲警報が鳴り、父は例によって近くの幟町小学校に詰め、解除になって帰宅したのが翌午前 2 時頃。父を迎えて母と三人、配給の砂糖で抹茶を喫した深夜の集い、これが永遠の別れの儀式となってしまった。

翌朝、自宅平屋の八畳間に父母と三人で川の字に寝ていた。ただ、真ん中の母の、「Y さんに挨拶に行ってくるからね」の声を、夢心地で聞いた私は、父と（空の布団を挟んで）一メートルほど離れて、まだうとうとしていた。

突然大地が揺れ、チラッと青空が見え、呻き声を耳にしたように思う間もなく、目覚めた時、私は家屋の瓦礫の下敷きに押しつぶされ、息は出来るが何も見えず、全く動けない。

地震のようにグラッとしたのではなく、まるで巨大な手で家ごと押しつぶされたという感じ。てっきり直撃弾だと思い、声の限りに「助けてくれえ」と叫んでみるも、あたりはシーンと静まり返って、何の反応も無い。耳を澄ますと、時々一方向に逃げるような足音が聞こえる。

何が起きたのか判らないまま私は、(隣にいるはずの父と共に) もう誰とも連絡の取れない状況になったらしいと観念してきた。その恐怖と孤立感を自分なりに押さえ込んだ時、「人間やはり死ぬときは一人」と肺腑に沁みて思うとともに、何かもう一人の自分が現れ、己が姿を見下ろして「嗚呼可哀想にこの若者、人生半ばで無為に、また恋も成さずに、去るのか」といった憐憫の情とともに涙する。それを拭う手も動かぬままに、何とか瞑想に入るべく気を引き締めようとする。我に戻ったような心地になり、思い出・心残り・悔恨などなどが走馬灯の如く、頭の中を駆け巡る。

この間どれ位時間が経ったものか、見当がつかないが、耳を澄ますと、シーンと時間が止まったみたい。が、「自分はまだ死んでいない」と思ったとたん、「お父さん」と大声で叫んでいた。何の応答も無いのに、俄かに興奮し「父は？母は？」の思いに駆られ、「生きねばならぬ」という意欲が、猛然と湧き上がってきた。

それまで、生き埋めの形で、下手に動いては崩れ落ちるような気がして、身動きはしなかったが、「こうなってはダメで元々」と、思い切って一気に体をねじってみる。自分の周りが割りに空いていると判ってから、腹を決めて上に向かって競り揚がる。何かあちこちに痛みを感じるが、死んでもいいと夢中で這い上がって頭が出て、瓦礫の上に出る。・・・まず下の父を何度呼んでも、瓦礫に耳をつけてみても、微かな気配も聞けなかった。

我に返ると、周りがやけに熱くまた暗い。世紀末のような、中国新聞か福屋かの窓からの炎以外(まだ昼間のはずなのに) 何もない光景。続いて駅方面に走る、多くが血まみれで皮膚がずり落ちた姿の、ばらばらの人が目に飛び込む。もはやこれまでと、心の中で手を合わせ、道路に飛び降りる。足が、柔らかいアスファルトにめり込みながら、稲荷町の市電鉄橋の袂まで来た。

そこには、ひどい火傷やけがで放心状態の人々、息絶え絶えの呻き声や「水をくれ」の眩き、「水やったら死ぬゾ」と叫ぶ声・・・この悲惨な「地獄図」に容赦も無く、凄い熱風が時々襲い掛かる。その度に川に飛び込んでやり過ごすうち、豪雨にも見舞われる。ふと空ろな気持で辺りを見まわした時、視線を感じて見れば、うちの仮設病院(道路拡幅で代わりに近所に借りていた)の普段着姿の看護婦山田日出子さんがいる。よく無事だと思ったが、その時何を話したか、全く記憶がない。なぜあの時せめて、一緒にいたはずの兄嫁泰子の消息を尋ねなかったのか、思えば悔しい。だが、口を利くのも恥しい若い二人の間で話が無かった事の意味を、冷静に分析出来たのは数十年以上も後のことになる。(後述)

やがて辺りは暗くなり、迎えの人に連れられるなどして段々人影もまばらになる。私らは迎えを期待もしないが、氣息奄々、生死不明の人々を前に何も出来ぬまま、呆然と立ち去りかねていた。が、やがて我に返り「桑原家に行く他なし」と腰を上げ、ハダシのまま、

西に向かって線路や鉄橋を通過、十キロの道を急いだ。

桑原家には、親類縁者二十人ほどが避難して来ていた。・前記のユキミさんは、食事から着るもの大部屋に布団を敷き詰めての寝所などの手配一切、それに翌日からの弁当などなど、よくも一手に切り回されたものと、頭が下がる。とは言えその時は、行方も知れぬ家族のことでしょ転倒し、私などは、慣れぬ食事や弁当になじめず、精神も不安定で、今思うと恥ずかしい所作もあったような記憶がある。

家族の消息を求めて彷徨った二週間

翌七日は早速爆心地へ、まず自宅跡へ駆けつける。目に飛び込んだのは父の白骨。どんな死に方かと走り寄る。綺麗な真っ直ぐに仰臥した白骨、ああ、あの業火で苦しんだのではなかったのか、私の声に答えなかったのも家の倒壊で「即死」していた故だったか・・・。

父は日頃「男たる者、上を向いて眠れ。体を曲げたりしてはならぬ」と教訓を垂れていた。この骨の形から、「父はあまり苦しめないで逝った」と、私は、今日まで自分の心に言い聞かせている。遺骨を残らず箱に入れ、森家の菩提寺「國前寺」に持参。

次は母の搜索に。被爆翌日の爆心地近くの、紙屋町から相生橋、それに大手町近辺の物凄い光景を文章に書けるのは、今にしてやっとできる、否できない・・・。

「死屍累々」という言葉も空々しく響き、やはりリアルに表現する術もないが、物凄い熱が人間を突然襲うと、こんな反射的行動、こんな形相になるのか、と虚ろな心眼で懸命に見まわす。苦しげに水槽に首を突っ込んだ、小柄な女性と分かる姿に思わず駆け寄り、赤く焼け爛れた遺体を持ち上げると、焼け爛れたその手はシカと赤子の遺骸を抱きしめている。・・・何か棒に躓いてよろめくと、それも焼け焦げの遺体。・・・「地獄」という言葉が空しく頭をよぎるが、仏も閻魔も居ない地獄なんて有るものか・・・。(あの地で命を絶たれた方々よ、母とお仲間の方々よ、こんな稚拙な文を書くことをお許し下さい・・・)

こんな状況では、もしこの中に若し居ても、とても母と識別するなど、不可能と思い諦めるまで、数時間は経過したであろうか・・・。夕暮れの道、重い足を引きずって、桑原宅に帰り着く。

行方も分からず死に目にも会えなかった母への思いは、近くにいた私の中で募るばかりで、今日でも「うつ」的な気分の時など、夜中に目覚め「あの時何とか見つけられなかったか・」と自責の念に苛まれる。後年になってのこと、母は一体何処で命を落したのか、時間的に冷静に考えた。私が「行ってくるよ」という母の言葉を耳にしてから、直ぐ母は家を出たはず。山口町電停から市電に乗り、紙屋町→爆心→横川町→己斐（現広島）→（広電の）高須駅→Yさん宅、という経路を経て、杳として行方不明になってしまった。つまり、母の言葉を聴いてから私の目覚め、つまり原爆までの時間は、「約三十分に違いない」というのが、母が身をもって逆に教えてくれた、というのが空しい結論、なんと言う不運！・・・。あと十五分早く家を出ていれば、少なくとも即死の目には遭わなかったであろうに・・・。当時あの爆心地では、身元不明の一万人も遺骸は「暁部隊」の人などの手で、参考にな

る事項、収容日時・場所等を付して茶毘に付し、一人ずつ骨壺に納めて「原爆供養塔」にとりあえず、納められている。私は帰郷の度に、墓参りの後は必ずその前に額づく。また広島市役所のデータ表に目を通し、何度か「もしや」と問い合わせたりもしたが、「同姓の別人」と判明したりして、空しく終わっている。でも、その中に必ず母はいるはずと、私はまだ諦めていない。

精一杯に生きた兄

兄恒良は、爆心直下の第五師団の西練兵場で朝礼の最中だったはずであり、生還は困難と想像していたが、消息を知る手立てに苦慮した。兄は長崎医大助教授の職を投げうって高齢の父を継ぐべく帰郷していたわけだが、医師は自発的に志願すれば直ちに「士官候補生」に任用される制度があり、勧誘もあったようだが、医家の跡継ぎの身を慮って、志願を延していた。それで（懲罰的に）一兵卒として召集され、厳しい訓練中であり、街中を行進のときなど、母は何处からか情報をえて、街角で好物を手渡したりしていた。

原爆の翌日から、焼け残った建物の壁や電柱が「伝言板」となり、親戚や知人の消息などを伝え合う場所となっていた。とくに国鉄広島駅前には夥しい数の文字が乱雑に書かれていた。私などに伝言など来るはずなし、と横目で見えていたが、四日目だったか、ふと立ち止まったとき、すぐ目の前の立て札に、僅か一行「森の若先生は、大田にいる」とある・・・、復旧したての汽車に飛び乗り、日本海岸の島根県同市に向かった。

収容先の小学校の講堂には、百人以上の重症者が寝かされていた。焼け爛れたすごい形相の方ばかりだったが、直ぐに兄と私は目が合った。顔や腕の露出部分は剥ぎ取られたような火傷のあとで白い膿が漏れているのも見える。そのとき、兄の最初の言葉は「病院の再建はどうするか」であった。爆心の自分が生きているので家族は皆元気と思い、それを考えながら、待ってくれていたのか・・・。兄は皮膚の深部までやられているためか、或いは医師らしく我慢していたのか、痛いとは言わず、膿に湧いた蛆が耳に入って「痒い」と訴えるのを、ピンセットで摘み取り、また赤チンを塗るばかり。

東京から駆けつけた兄茂と、空しい「看病」を続けて三日目ほどして、長兄の長男「弘」が到着。（彼は高師附中の「科学学級」に選ばれ入学したばかりで、広島山地の東城町の同校にいた）茂兄と私は、看病を弘にまかせて一度広島に戻って、不明の三名の消息を追ったりした。長兄の容態は、寝たきりながら一応流動食は摂り一進一退。講堂の方々は次々と息を引き取る中、弘が医者から「お父さんは助かるかも」と言われた日もあったが、八月二十日を過ぎた日、にわかに食物がそのまま排泄される状況になって容態急変、二十三日夕刻息をひきとる。享年四十二歳。日暮れて校庭にて茶毘に付す。

思えば兄は、もし広島に戻らずに長崎医大の産婦人科助教授を続けていれば、「生めよ増やせよ」の時代のこと、「召集」など無かったろう、でも、長崎も原爆に見舞われ、爆心の医大の人も多く死亡しておられ、どうなったか。しかし少なくとも、広島に戻っていなければ、一生の最期を、一兵卒の特訓中に終わるという悲劇もなかったろうにと、この親への情深き兄に、哀悼の情を新たにす。

康子の悲運とその母の消息

弘の妹「康子」は県女高師付属山中高女の一年生で、当日は朝七時半過ぎから（爆心近くの）雑魚場町（現国泰寺町）に疎開建物の取り壊し作業に動員されていた。同校編集の「追悼記」によると、三百三十三名中生存者二名、名簿の中に康子の名は「作業現場で死亡」とある。このことは、当時我々三人には知る由もなく、打つ手も無かったけれども、年を経て、この十三歳で逝った姪に思いを馳せるうち、思い当たったことがある。

というのは、被爆直後のあのとき、看護婦山田さんが私に、兄嫁泰子の事について何も言わなかった、乱れの少なかった山田の姿から、つぶれた家から逃げ出してきたとは思えず、姉も無傷だったと思われる。とすれば、姉はひたすらに、夢中で康子の救出に向かったに違いない。彼女の目にはそれは自然の行動と映り、山田さんがあの時私に言わなかったのも無理からぬこと。（前記書によれば当日は作業二日目で「午前七時半学校に集合し、爆心に近い作業現場へ赴いた由」とすれば、場所を知る姉は、作業地に走り、娘を求めて火の海の中へ飛び込んでいったに違いない。嫂の里、山口県平生町の森本の父らが二日後に駆けつけ、石見屋町の仮説病院跡に行き遺骨を捜したが見つからなかったという、事実とも符合する。・・・すなわち、嫂の絶命した場所は、中心地近くで、或は康子と一緒にいたかも知れない。すなわち、母・嫂・姪は三名とも、同じく爆心地近くで死亡し、身元不明の遺骸となって、収容されたと想う他は無いのだろうか。そして、正に「千の風」となって、いまも我らの上を舞っているのであろうか

どっと来た「原爆症」——そして独り生き残る

兄らと一緒に夢中で走り回った三週間、寝食一切は桑原ユキミさんの手厚いお世話で来たが、暑さと、それに肉親を救えなかったという苦悩で食欲はないものの、連日の海田と市内との徒歩の往復などで「疲れた」とは感じたこともなかった。しかし、とにかく一度はと、兵庫県西宮北口の次兄山香三郎宅に戻ったのが八月末。

新聞には「原爆症」のことが出始めていたし、何だか風邪っぽい気分がしたので、軽い気持で阪大小沢内科に検診に訪れた。「本当に何ともないんですか。白血球が七百しかないが・・・」と言われ、それが正常値の十分の一！と知って愕然。そのうち高熱を発して、山香家宅で寝込んでしまった。次兄三郎は私より十六歳年長で、末っ子の偏食で病弱な私を、わが子のように「ヒロヨシ」（幼名）と可愛がってくれたが、それから義姉民子さんに大変な面倒を掛けてしまう。朝は三十七―十八度、夕方は三十九度以上の熱、という状況が一ヶ月以上続く。特別の病気とあって、近所の医者への往診も続かず、唯一の治療法の輸血も、細った腕では、器用な兄茂だけ可能という始末。兄は休学して、丹念に体温表を記し、姉とともに便の世話からひどい床ずれの手当てなど一切の看護に没頭してくれた。その間復員してきた兄三郎も熱病症状を起し、幼児を抱えての義姉の苦労は、終生忘れ得ない。

十月下旬になると、朝から四十度以上の熱が連日続き、私の寝床を囲んで家族が座っている光景をぼんやりながめ、「いよいよ最期か」と覚悟したのを憶えている。世話になってきた親戚の三木孝造氏（武田薬品常務後に副社長）は、同社主任社医高村氏に最後の治療法

の「決断」を求めた結果、それまでの輸血などをすべて取り止め、同社十三工場特製の生理的食塩水に若干の栄養剤を加えたリングル状のものを大腿部に筋肉注射、それに発明したてのアリナミン（活性ビタミンB1）を大量に脊椎沿いのツボに注射という治療に切り替えた。

忘れもしない十一月三日朝、いつもの通り検温器を入れると、熱は急転直下「三十六度！」を示していた。・・・二ヶ月を超える熱病で、文字通り骨と皮、脛などは象皮色のスリコギまがい、お尻は床ずれで血染めの猿のお尻という姿。寝床の下に二枚の畳は高熱のため芯まで腐っているというすさまじさであった。

平熱となっては、十九歳の若者だけに食欲はすごいものだった。朝の瀬戸内海イワシの振り売りの声「トレトレ！」を聞いただけで、どっと涎が出て枕をぬらすという始末。それでも体の回復は遅々たる状況で、正月元日にやっと隣の部屋へ這って行き、雑煮を家族と一緒に祝うことが出来た。

白血球が三千に戻り、高村先生に許され初めて広島に戻ったのは五月だった。我が家の跡地に見知らぬ外人が勝手に家を建てていたのを、陰悪な交渉で退去させたり、父母の疎開荷物の確認、若干の貯金の搜索や払い戻しなどなど、それまで兄三郎夫妻に衣食住すべて全面依存だったが、少しでもと、自分たちの生活設計の準備に着手し始めた事であった。